

〔 水 稻 〕

1 水稻(うるち)コガネヒカリ(東北125号)の
奨励品種編入 (農試 技術部)

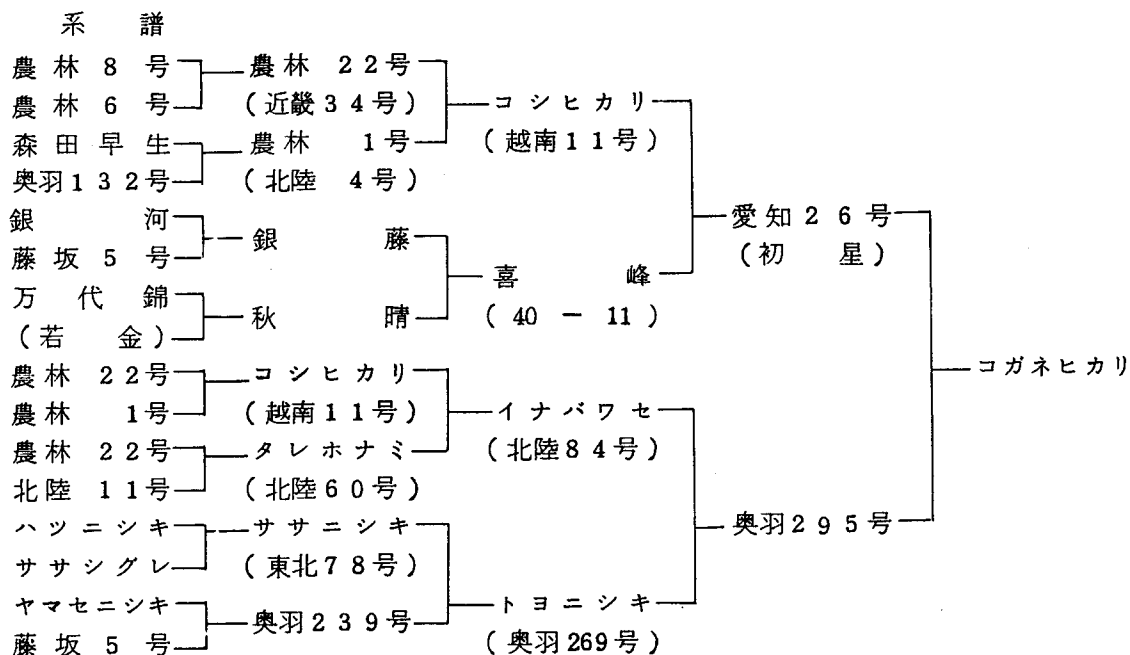
出穂、成熟期がトヨニシキなみの晩生種、ササニシキ、トヨニシキにまさる多収性と耐冷性を持ち、いもち耐病性はトヨニシキよりやや劣るがササニシキよりまさり、やや短稈でトヨニシキなみの耐倒伏性をもった安定品種。とくに食味はトヨニシキより良好でササニシキに近い。

(1) 来 歴

「コガネヒカリ」は、昭和49年4月に、宮城県古川農業試験場において、中生の強稈良質耐病品種の育成を目標として、良食味系統である「愛知26号」(のちの「初星」)を母とし、良質強稈耐病系統である「奥羽295号」を父として人工交配が行われ、その後代から育成された系統である。昭和49年7月から同50年3月までの間にF₁～F₃を温室で世代促進栽培し、同50年夏期に本田においてF₄雑種集団を栽培して個体選抜を行い、翌年から系統栽培をして選抜固定をはかってきたものである。

昭和52年「古2839」として生産力検定試験、特性検定試験ならびに系統適応性検定試験に供試し、昭和53年「東北125号」の系統名で各県に配布された。

岩手県においては、昭和53年から県南分場で生産力検定予備調査に供試し、昭和55年から生産力検定調査並びに現地調査に供試して、収量及び特性を検討した結果有望と認められた。



(2) 特 性 概 要

1) 形 態 的 特 性

- (ア) 移植時の苗の草丈は トヨニシキ並で葉色は濃く葉身のたれが少い。
- (イ) 最高分けつ期の草丈は トヨニシキよりやや長く、茎数の確保も容易である。穂首分化期以降葉色は淡緑となり草姿良好となるが、出穂後は止葉はやや大きく開く。
- (ウ) 成熟期の稈長はトヨニシキより5cm～6cm程度短かく、穂長はトヨニシキ並、穂数はトヨニシキより多い やや短稈の中間型品種である。
- (エ) 籾の粒着はやや疎着で、2次枝梗の着粒が少なく、出穂後の登熟速度はトヨニシキ並、登熟歩合はササニシキよりまさるが、トヨニシキよりやや劣る。
- (オ) 穂揃、熟色とも良好で、少程度の短芒を有し、ふ先色は黄色である。
- (カ) 玄米の粒形は中円で千粒重はトヨニシキより0.7g～1.3g程度重く光沢、色沢は良好であるが、登熟期の気象不良年次ではトヨニシキより腹白が目立ち未熟粒が出易い。平常年ではトヨニシキ、ササニシキ並の品質である。
- (キ) 搗精歩合はササニシキ並で、搗精時間はトヨニシキより短く、胚芽の残存も少い。
- (ク) 食味の評価はササニシキに及ばないが、トヨニシキ、キヨニシキよりすぐれている。
- (コ) 収量性は標肥、多肥条件ともトヨニシキ、ササニシキより多収である。

2) 生 態 的 特 性

- (ア) 出穂はトヨニシキ並であるが、成熟期はトヨニシキよりやや早い。
- (イ) 強稈で倒伏抵抗性はトヨニシキ並か、ややまさる。
- (ウ) いもち病真性抵抗性遺伝子はPi-aと推定され耐病性は葉・いもち病ともにトヨニシキよりやや劣るが、キヨニシキよりは強い。
- (エ) 耐冷性はササニシキ、トヨニシキより不稔の発生は少く、トヨニシキ、ササニシキよりは強い。
- (オ) 低温登熟性は、トヨニシキより劣るが、ササニシキよりまさるものと思われる。

(3) 岩手県で奨励品種に採用する理由

最近の米の需給事情から、食味の良好な商品性の高い米の生産と異常気象に対応した安定品種の選定が、強く要望されている。

コガネヒカリは、昭和53年から県南分場並びに県中部以南の現地試験で検討した結果、ササニシキ、トヨニシキにまさる多収性と耐冷性を持ち、いもち耐病性は、トヨニシキよりやや劣るが、ササニシキよりまさり、やや短稈で、トヨニシキ並の耐倒伏性と、耐肥性をもった安定品種である。特に食味はトヨニシキより良好でササニシキに近い食味をもっていることから奨励品種に編入して収量の安定化と食味の向上をはかりたい。

(4) 適 応 地 帯

北上川中流（紫波以南）から北上川下流地帯、
 東南部の平坦地、南部沿岸（釜石以南）地帯を対
 象とする。対象品種としては、主としてトヨニシ
 キ、またササニシキでは栽培がやや不安定な地帯
 の（地下水位高、排水不良田、高標高100～150
 m）水田に作付されたものを対象とする。

普及見込面積7,000 ha～10,000 ha

(5) 栽培上の留意点

(ア) いもち耐病性はササニシキよりまさるが、ト
 ヨニシキより劣ることから、いもち病および紋
 枯病の防除は基準に従って適期防除に努めるこ
 と。

(イ) 登熟期の気象不良年次には未熟粒の発生が多
 くなることから、出穂遅延を招くような栽培を
 さげ登熟良化を計ること。

(ウ) 窒素施用量はトヨニシキ並とする。とくに穂
 首分化期以降の葉色はトヨニシキに比較して淡緑であることから、トヨニシキの葉色の慣れで無
 理な追肥をしないよう留意する。

(エ) コガネヒカの刈取適期幅は1,000℃～1,150℃で1,200℃を超えると玄米の光沢色沢が劣りま
 た茶米の発生が多くなり品質低下を招くので刈取時期に注意する。

(6) 試験成績概要

1) 特 性 調 査

(ア) 総 括 表

系 統 名 また 品 種	苗 丈	苗葉色	稈		芒		ふ先色	粒 着 密 度	脱 粒 難 易
			細 太	剛 柔	多 少	長 短			
コガネヒカリ	中	やや濃	やや太	やや剛	少	短	黄 白	やや疎	難
トヨニシキ	中～ やや長	やや濃	中	やや剛	少	短	黄 白	中	難
キヨニシキ	中	やや濃	やや太	中	中	中	黄 白	やや密	難
ササニシキ	中	中	やや細	柔	極 少	短	黄 白	中	難

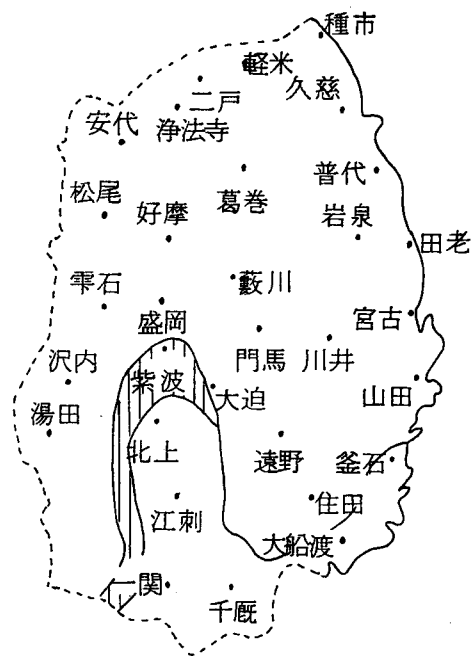


図1 適応地帯区分

注) 縦線の地帯は出穂が8月20日以降に
 なった場合は出穂後40日間の平均気温
 20℃を確保できない地帯を示す。

2) 生育調査

(ア) 標肥条件

① 成苗移植

(生産力検定予備調査・県南分場)

系統名または品種名	年次	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟日数 (日)	倒伏	成熟時		
						稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数(本/m)
コガネヒカリ	53	8.4	9.18	45	0	81.1	19.3	355
	54	8.7	9.19	43	0	81.0	18.6	370
	平均	8.6	9.19	44	0	81.1	19.0	363
(比)トヨニシキ	53	8.3	9.18	46	0~0.3	87.9	19.1	354
	54	8.7	9.22	46	0~0.1	82.0	18.3	334
	平均	8.5	9.20	46	0~0.2	85.0	18.7	344
(比)ササニシキ	53	8.4	9.22	49	1.2	86.3	18.7	416
	54	8.9	9.24	46	1.3	84.0	17.7	438
	平均	8.7	9.23	48	1.3	85.2	18.2	427

② 稚苗移植

(生産力検定調査・県南分場)

系統名または品種名	年次	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟日数 (日)	倒伏	成熟時		
						稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数(本/m)
コガネヒカリ	55	8.7	9.27	51	0	60.8	17.5	469
	56	8.14	10.12	60	0.2	82.1	20.1	395
	平均	8.11	10.5	56	0.1	71.5	18.8	432
(比)トヨニシキ	55	8.9	10.3	55	0	65.3	17.6	422
	56	8.14	10.11	59	0.3	88.3	19.7	340
	平均	8.12	10.7	57	0.2	76.8	18.7	381
(比)ササニシキ	55	8.9	10.3	55	0	68.3	17.5	556
	56	8.14	10.14	62	3.2	88.8	20.0	444
	平均	8.12	10.9	59	1.6	78.6	18.8	500

(イ) 多肥条件

① 稚苗移植

(生産力検定調査・県南分場)

系統名または品種名	年次	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	成熟日数 (日)	倒伏	成熟時		
						稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数(本/m)
コガネヒカリ	55	8.9	10.2	55	0	64.8	17.9	498
	56	8.14	10.13	61	1.9	86.8	20.4	448
	平均	8.12	10.8	58	1.0	75.8	19.2	473
(比)トヨニシキ	55	8.11	10.4	55	0	72.0	17.6	495
	56	8.14	10.13	61	2.2	92.8	20.0	395
	平均	8.13	10.9	58	1.1	82.4	18.8	445
(比)ササニシキ	55	8.11	10.5	56	0	73.4	17.4	592
	56	8.14	10.16	64	3.7	95.2	19.6	495
	平均	8.13	10.11	60	1.9	84.3	18.5	544